

などにや、蛇は合子のあみかたより出たりとみゆ、常のは大森村の外に、麥わらの手遊び賣所なし、

駒込麥わらの蛇は、寶永の頃此の處の百姓喜八と云もの是を作りて、祭禮の日市に賣る、一とせ疫病はやりし時、此蛇ある家は免れたりと云ふ、雜司谷麥稈の角兵衛獅子は、高田の四ツ家町に住し、久米と云へる女製し初たり、寛延二年の夏の事なり、其ころ參詣多かりしかば、よく售たりとぞ、

〔易林本節用集波〕乾坤。麥秋月。

〔日次紀事四月〕自此月尾至五月初農民刈麥、是謂麥秋、民間稱附麥秋、凡農民多食麥、故悅麥秋、

〔倭訓栞中編二十六〕むぎのあき 野客叢書に、物熟謂之秋、取秋斂之義、故謂四月爲麥秋、と見えたり、歌にむぎの秋風などもよめり、

〔本朝無題詩七〕旅館附路次、著阿惠島述志

問泊昨來阿惠島、泊名也蒼々遠岸絕無涓、卸船未出風東曉、厨饅始羞日、午時念誦之間、朝食及午、故云、雨柳塘花

落早、待秋麥壟子生遲、此島之民不耕田、畝多、墮麥、墮其于熟、以仲夏爲秋、故云、貧而赴洛勿相咲、春色自爲行步資、

〔傍廂後篇〕麥秋

麥秋といふは、四五月の頃なり、秋にはあらねど、稻は秋にみのる故に、それになすらへて、麥のみのる頃を秋とはいへるなり、野客叢書、宋子京有皇帝幸南園觀刈麥詩、曰、農扈方還夏、官田首告秋、注、臣謹按物熟謂之秋、取秋斂之義、故謂四月爲麥秋、禮月令にも、麥秋至とあり、朗詠集にも、五月蟬聲送麥秋とあり、夫木集に、おくるてふ蟬のはつ聲聞くよりも今はと麥の秋をしるかな、これらをもてみれば、秋はあかりの約にて、あかりはあからむといふ義なる事うつなし、

〔延喜式四十二〕東西市。麥廬。右五十一廬、東市

釋蓮禪